

最適化数学 第6回

[今回の項目]

- ① 復習：ラグランジュ乗数法
- ② 等式制約が複数ある場合
- ③ 不等式制約問題

等式制約が二つある場合

[定理]

最小化問題

$$\text{最小化 } f(x)$$

$$\text{制約 } g_1(x) = 0, g_2(x) = 0$$

を考え、 \bar{x} を局所最小解とする。 $\nabla g_1(\bar{x}), \nabla g_2(\bar{x})$ が一次独立ならば、ある数 λ_1, λ_2 が存在して、以下が成り立つ：

$$\nabla f(\bar{x}) = \lambda_1 \nabla g_1(\bar{x}) + \lambda_2 \nabla g_2(\bar{x})$$

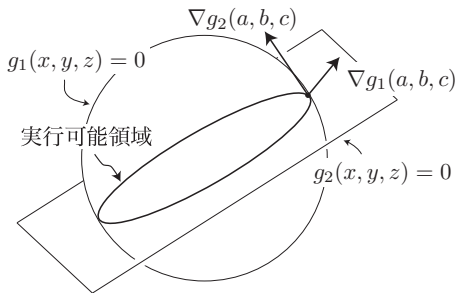
$$g_1(\bar{x}) = 0, g_2(\bar{x}) = 0$$

定理の解説

制約式が複数の場合は 3 変数の問題を考えた方がよい. $\alpha, \beta, \gamma, \delta$ を定数とする. 以下の問題に対して, $\bar{x} = (a, b, c)$ を局所最小解とする.

$$\text{最小化 } f(x, y, z) = \alpha x + \beta y + \gamma z + \delta$$

$$\text{制 約 } \begin{cases} g_1(x, y, z) = x^2 + y^2 + z^2 - 1 = 0 \\ g_2(x, y, z) = x + y + z - 1 = 0 \end{cases}$$



等高面

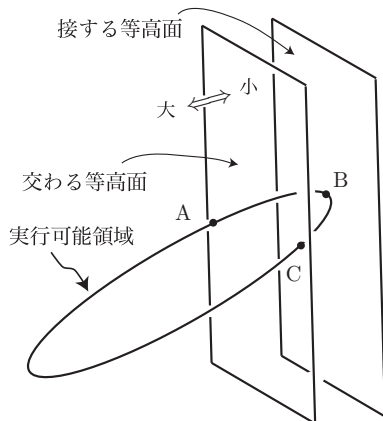
3変数関数が同じ値をとる点
 (x, y, z) の集合

$$f(x, y, z) = (\text{定数})$$

を等高面と呼ぶ。
点が $A \rightarrow B \rightarrow C$ と動くとき、
増減表は

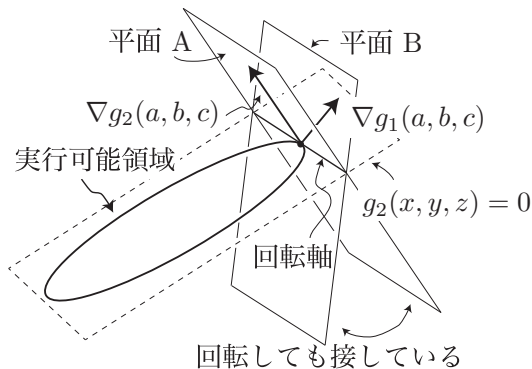
(x, y)	A		B		C
$f(x, y)$	大	↘	小	↗	大

となる。よって、点 B で局所最
小解をとる。



局所最適解で目的関数の等高面は
実行可能領域と接する

実行可能領域と接する平面



よって、実行可能領域に接する平面の法線ベクトルは、回転させた平面のものも含めて、

$$\lambda_1 \nabla g_1(a, b, c) + \lambda_2 \nabla g_2(a, b, c)$$

と書けることがわかる。

等式制約が二つある場合

[定理]

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x) \\ \text{制約} & g_1(x) = 0, g_2(x) = 0 \end{array}$$

に対して, \bar{x} を局所最小解とする. $\nabla g_1(\bar{x}), \nabla g_2(\bar{x})$ が一次独立ならば, ある数 λ_1, λ_2 が存在して, 以下が成り立つ:

$$\begin{array}{l} \nabla f(\bar{x}) = \lambda_1 \nabla g_1(\bar{x}) + \lambda_2 \nabla g_2(\bar{x}) \\ g_1(\bar{x}) = 0, g_2(\bar{x}) = 0 \end{array}$$

(a, b, c) は局所最小解

\Rightarrow 局所最小解で目的関数の等高面と実行可能領域は接する

$\Rightarrow \nabla f(a, b, c) = \lambda_1 \nabla g_1(a, b, c) + \lambda_2 \nabla g_2(a, b, c)$

例題

最小化 z

制 約 $x^2 + y^2 + z^2 = 4$

$$3x - \sqrt{3}y + z = 3\sqrt{3}$$

練習問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & 2x + y + z = 1 \\ & x - y - z = 0 \end{array}$$

不等式制約問題

Example (射影問題)

平面 $4x + y + 2z = 2$ と単位球の内部 $x^2 + y^2 + z^2 \leq 1$ との共通部分の点で、点 $(2, 3, 4)$ までの距離が一番近い点を求めよ。この問題は

$$\text{最小化 } f(x, y, z) := (x - 2)^2 + (y - 3)^2 + (z - 4)^2$$

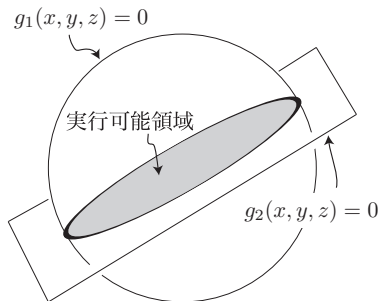
$$\text{制約 } g_1(x, y, z) := x^2 + y^2 + z^2 - 1 \leq 0$$

$$g_2(x, y, z) := 4x + y + z - 2 = 0$$

と定式化できる。すると制約式に不等式と等式が現れる。

射影問題

最小化 $f(x, y, z) := (x - 2)^2 + (y - 3)^2 + (z - 4)^2$
制約 $g_1(x, y, z) := x^2 + y^2 + z^2 - 1 \leq 0$
 $g_2(x, y, z) := 4x + y + z - 2 = 0$



不等式が一つの場合

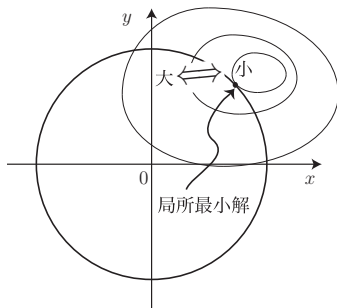
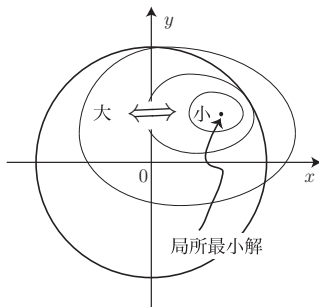
まず制約式が円周とその内部を表す不等式一つの場合

$$(P) \text{ 最小化 } f(x, y)$$

$$\text{制 約 } g(x, y) := x^2 + y^2 - 1 \leq 0$$

(a, b) を局所最小解とすると、次の二つの場合が考えられる：

- 1 (a, b) が円の内部にある ($g(a, b) < 0$) 場合
- 2 (a, b) が円周上にある ($g(a, b) = 0$) 場合



(a, b) が円の内部にある ($g(a, b) < 0$) 場合

このとき,

$$\nabla f(a, b) = \mathbf{0}$$

が成り立つ.

解説 (a, b) は制約なしの最小化問題

$$(P') \quad \begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) \\ \text{制 約} & \text{なし} \end{array}$$

の局所最小解である. これを次の具体例で説明する.

$$\left\{ \begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array} \right. \quad \left\{ \begin{array}{ll} \text{最小化} & x^2 + y^2 \\ \text{制 約} & \text{なし} \end{array} \right.$$

左側の問題の最小解は $(0, 0)$ である. ここで, 最小解が実行可能解の内部に含まれているので, 制約を外した右側の問題の最小解も $(0, 0)$ になる. 一般の場合も同様なので, $\nabla f(a, b) = \mathbf{0}$ が成り立つ.

(a, b) が円周上にある ($g(a, b) = 0$) 場合

このとき, ある実数 λ が存在して,

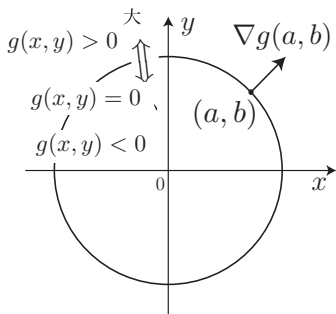
$$-\nabla f(a, b) = \lambda \nabla g(a, b) \quad \text{かつ} \quad \lambda \geq 0$$

が成り立つ (λ の符号が ≥ 0 であることに注意).

解説 一般的に $\nabla g(a, b)$ は g の等高線に直交し, g の値が増える方向を向いている. 一方 $\{-\nabla f(a, b)\}$ は, 目的関数 f の等高線に直交し値が減る方向なので前出の図の右図より, 実行可能領域の外側を向いている. よって, 二つのベクトルが同じ方向を向いていることから

$$-\nabla f(a, b) = \lambda \nabla g(a, b), \quad \lambda \geq 0$$

となる.



KKT 条件

上記二つの場合をまとめて書くと、

[定理]

最小化問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x) \\ \text{制約} & g(x) \leq 0 \end{array}$$

に対して、 \bar{x} が局所最小解であり、 $\nabla g(\bar{x}) \neq \mathbf{0}$ ならば、ある数 λ が存在して、以下が成り立つ：

$$(*) \quad \begin{cases} -\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x}) \\ \lambda g(\bar{x}) = 0, \lambda \geq 0 \\ g(\bar{x}) \leq 0. \end{cases}$$

最小化 $f(x)$ に対して、 \bar{x} が局所最小解であり、
制約 $g(x) \leq 0$ $\nabla g(\bar{x}) \neq \mathbf{0}$ ならば、ある数 λ が存在して、以下が成り立つ：

$$(*) \quad \begin{cases} -\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x}) \\ \lambda g(\bar{x}) = 0, \lambda \geq 0 \\ g(\bar{x}) \leq 0. \end{cases}$$

証明.

$g(\bar{x}) < 0$ のときは、上記議論の (1) より $\nabla f(\bar{x}) = \mathbf{0}$ となる。
 $\lambda = 0$ とおくと、 $-\nabla f(\bar{x}) = \mathbf{0} = \lambda \nabla g(\bar{x})$ となり、また $\lambda = 0$ より
 $\lambda g(\bar{x}) = 0$ なので、(*) が成り立つ。

$g(\bar{x}) = 0$ のときは上記議論の (2) より、ある実数 λ が存在して、
 $-\nabla f(\bar{x}) = \lambda \nabla g(\bar{x})$, $\lambda \geq 0$ となる。また、 $g(\bar{x}) = 0$ より
 $\lambda g(\bar{x}) = 0$ なので、やはり (*) が成り立つ。 □

例題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) = x^2 + 6xy + y^2 \\ \text{制 約} & g(x, y) = x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array}$$

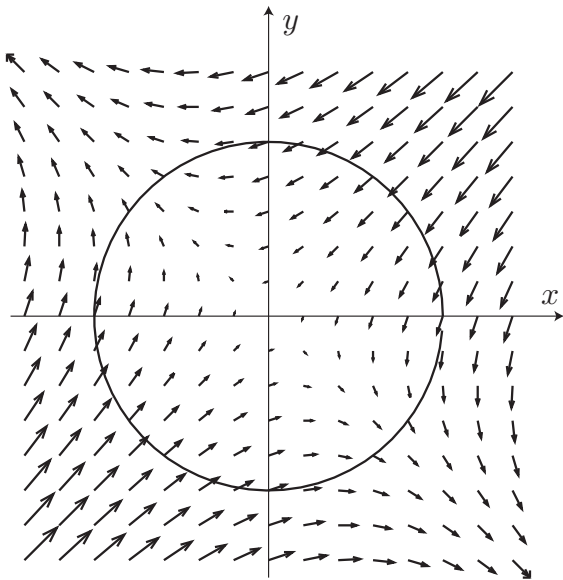


Figure : 点 $(\pm 1/\sqrt{2}, \mp 1/\sqrt{2})$ で $-\nabla f(x, y)$ が直交外側を向いている.

練習問題

$$\begin{array}{ll} \text{最小化} & f(x, y) = x^2 + 3xy + y^2 \\ \text{制 約} & g(x, y) = x^2 + y^2 - 1 \leq 0 \end{array}$$